

中国遼代における法舍利埋納遺跡調査記

劉 海 宇^{*}

実施日 2018年6月27日～7月4日

参加者 菅野成寛（岩手大学平泉文化研究センター）

劉 海宇（岩手大学平泉文化研究センター）

はじめに

遼は、契丹という遊牧民族によって建立された国家で、10世紀の初頭に大契丹国を国号として建国されてから、1125年に女真族の金に滅ぼされるまで、凡そ200年間存在した王朝である。遼の皇族は、仏教を篤信し、11世紀にその最盛期を迎えた。たとえば、第7代興宗（1031～1055在位）はもっとも仏法を重視し、その母親の章聖皇太后（欽愛皇后）は、1049年に慶州で釈迦仏舍利塔（白塔）を建て、その皇后の仁懿皇后（？～1076）も数多くの寺院や仏塔を建立したのである。遼の仏教は、日本のそれと同時代性を持ち、とくに同じく1052年を末法元年とする認識が存在したことがすでに指摘されている（市元壘 2011）。遼寧省朝陽市北塔の地宮から出土した石経幢に「大契丹国重熙十三年歲次甲申四月壬辰朔八日己亥午時に再葬し訖り、像法更めて七年有らば末法に入る」と刻まれ、重熙十三年の1044年より、さらに7年経過すれば、末法に入ると読み取れる（遼寧省文物考古研究所等 2007）。

慶州の釈迦仏舍利塔（白塔）の修復工事は1988年から1992年にかけて行われ、その際、塔の天宮から数多くの法舍利及び法舍利容器等々が発見された（徳新等 1994）。木製の法舍利塔に『妙法蓮華經』などが納入され、その經典を包む経袱に「舍利」・「法華經一部全身舍利在此塔中」と墨書される（図3・4）。これらの相輪をもつ法舍利塔（図3・6・7・8）は、日本の北部九州の経塚から出土した相輪をもつ経筒（図1）と意匠が近いだろう。

筆者らは日本経塚の起源と源流を東アジア社会における仏教文化史的な動向のなかに位置付けるため、昨年度の中国江南地区（主に浙江省と江蘇省）における法舍利埋納遺跡の調査（劉海宇 2018）に続き、今年度は遼代における法舍利埋納遺跡と遺物を中心に、内蒙古の赤峰・遼寧の朝陽・北京などで以下のとおり調査を実施した。

2018年6月27日（水）

11:30 羽田空港で合流後、13:55 発のCA182便で北京国際空港に16:45 到着した。その後、荷物を取り、乗り継ぎの専用通路を利用して国内線旅客ターミナルのゲートラウンジへ向かった。内

* 岩手大学平泉文化研究センター

モンゴル自治区赤峰行きの CA1281 便が 20:30 発のため、まず途中のレストランで「狗不理」という名物の肉まんとおかずなどで夕食を取った。結局、国内線が一時間近く遅れて出発し、赤峰空港に着いたのは 22:30。レンタカー会社の方が迎えて、赤峰賓館に送ってくれた。ホテル到着後、レンタカーを借りる手続きを済まし、チェックインしたのが夜の 12 時を回っていた。

2018 年 6 月 28 日 (木)

09:30 赤峰賓館をチェックアウトして、赤峰市博物館 (図 2) へ向かった。10:00、博物館宣教部の孫雪江氏が迎えてくださった。簡単な挨拶をした後に、早速博物館の陳列を案内してもらった。常設展には中国北方の代表的な新石器時代文化である紅山文化の展示室—「日出紅山」、夏家店文化を中心とする赤峰 4 千年の青銅文化を展示する「古韻青銅」、契丹族の建立した王朝である遼の歴史と遺物を展示する「契丹王朝」、女真族の建立した金の歴史と遺物を展示する「黄金長河」など 4 つの展示室があり、「契丹王朝」展示室を中心に見学した。慶州白塔及びそこに納入された木彫法舍利塔などの法舍利関連遺物がパネルで紹介されていたが、実物は無かった。見学後、博物館ショップで『赤峰博物館文物考古文集』・『赤峰古代墓葬』・『赤峰古代仏塔』・『赤峰古代長城』などの書籍を購入した。

12:00、博物館を離れて、近くの餃子屋で昼食。その後、3 時間近くかけて赤峰市から北上し、途中見渡す限りの大草原の景色を鑑賞しながら、高速道路と一般道を半分ぐらいずつ走って、16:00 過ぎに巴林右旗政府所在地の大板鎮に到着、巴林賓館にチェックイン。ホテル前は文化広場となり、博物館や印材としての巴林石 (鶏血石など) の売店が多くある。しばらく休憩の後、ホテル内のレストランで名物の羊肉料理等を満喫した。

2018 年 6 月 29 日 (金)

08:30 巴林賓館を出発し、近くにある巴林右旗博物館へ。館長の商原馳氏にご挨拶し、図録『巴林右旗博物館文物精品薈萃』の寄贈を受け、こちらから『岩手大学平泉文化研究センター研究年報』第 6 号等を謹呈した。その後、担当者の蘇依拉女史の案内で展示室を見学し、特に今回の調査の目的である慶州白塔から出土した法舍利及びその容器の法舍利塔等を詳細に調査した。10:00 博物館から出発、11:40 に地元で「白塔子」と称される慶州白塔に到着。商館長のお計らいで、事前に白塔の管理員の魏国強氏に連絡したため、昼休みの時間帯でも順調に展示室と白塔を見学することができた。

慶州は、第 6 代聖宗の陵墓の永慶陵 (慶陵) の維持のため、1031 年に設置された都市で、のちに第 7 代興宗と第 8 代道宗の陵墓もここに置かれた。現在の内モンゴル自治区巴林右旗大板鎮の北 80km ほど離れる索博日嘎鎮に位置しており、当時、都城の上京臨潢府に次ぐ大都会であったが、現在は、城壁の址の一部が地面の上に見えるほか (図 10)、その北西部に聳え立つ慶州白塔のみが残っている (図 9)。

白塔から発見された遺物は、相輪の中に奉納されたもので、金板に「相輪櫨中陀羅尼呪」と彫られているため、『無垢淨光大陀羅尼經』の「相輪櫨中陀羅尼法」によって埋納されたものと推測されている。銀製及び木製の法舍利塔が 100 基以上も検出され、なかに陀羅尼呪や『妙法蓮華經』などが納入されている。ほかに供養香料・涅槃佛磚函や建塔碑銘 2 通などもあり、特に建塔碑銘に「金法舍利」を安置したと刻されており (図 5)、これらの金板経・銀板経・紙本の經典などは法舍利として安置されたとわかる (徳新等 1994)。

13:30 索博日嘎鎮の軍烏拉大酒店で遅めの昼食を取り、その後、赤峰への帰途に向かった。途中、大板鎮近くでゲリラ豪雨に会い、道が洪水に覆われ、やむを得ず発電所の近くに遠回りして、18:

30 赤峰に到着。ホテルに入る前に、雨で汚れた車を洗車した。

2018年6月30日(土)

08:00 赤峰賓館から出発、高速道路で遼寧省の朝陽へ。11:00 朝陽北塔に到着、まず北塔博物館で、1988年11月北塔の天宮と地宮から発見された遺物を見学。北塔博物館と北塔は昼休みがあるため、近くの「大壇小罐」で昼食を取って、先に南塔の隣にある朝陽市博物館を調査。その後、北塔に戻り、地宮を見学。15:00 赤峰へ戻り、17:30 到着。

朝陽は、三燕期(AD361～436)の都城の龍城で、隋代では柳城郡、唐代では營州、遼代では覇州と改名する。北塔は、三燕期に仏塔として造営され、隋代の文帝によって舍利が安置され、遼代には2回修復された。天宮と地宮に発見された遺物は、主に重熙13年(1044)2回目の修復時に埋納されたものである(遼寧省文物考古研究所等2007)。金舍利塔は小型ではあるが(図11)、平泉中尊寺の金色堂の意匠と近い。また、七宝塔及びその中に納入された木胎銀棺(図12)、金・銀・銅・真珠で造られた法舍利塔(図13)、鍍金銀舍利塔及び木製の法舍利塔(図14)がとても印象的だった。ほかに、銘文資料として、『今聊記石匣内』に「大契丹重熙十二年四月八日再葬、像法更有八年入末法。故置斯記」と、経巻を納入した舍利函の題記磚に「此舍利不是元物舍利」とある。

2018年7月1日(日)

07:20 ホテルから出発、07:50 赤峰空港に到着。連合航空KN2922便赤峰09:15飛び立ち、10:30 北京西苑に着陸。専用車の運転手の王克さんに迎えてもらって、首都博物館へ向かい、博物館近くの湖南料理で昼食を取ってから、博物館を見学。その後、西郊賓館へ送ってもらい、チェックイン。

首都博物館に、房山雷音洞から出土した隋代の舍利函などが展示されており、翌日に調査するための予備勉強だった。

2018年7月2日(月)

09:00 ホテルから出発、10:30 房山雲居寺に到着(図15)。雲居寺は、唐代貞観5年(632)に創建され、清代乃至民国時代まで継続された有名な寺院である。唐代の石塔及び遼代の北塔・南塔はよく保存されており、また遼金期の石経は1万点以上現存されている。展示室には隋代から近代までの関係資料が陳列されている。遼代北塔の四角に、それぞれ唐代の石塔が安置され、それは景雲二年(711)に造営された景雲塔・開元十年(722)と十五年(727)の開元塔2基・太極元年(712)に造営された太極塔である。北塔は円形の法舍利塔であり、その塔身に装飾された銘文磚に「諸法因縁生、我說是因縁、因縁盡故滅、我作如是説」との法身偈がある。

13:00 雲居寺から出て、近くの「雲居素菜館」で精進料理を試食。14:00 石経山に登山、片道40分で雷音洞に到着、隋唐期の蔵経洞を見学。雷音洞に静琬によって彫造された石経は保存されており、その地面の中心部に穴が開鑿され、中から隋大業十二年(616)銘の舍利函が出土(図16)。16:30 麓の駐車場に下山、18:00 ホテル到着。

2018年7月3日(火)

09:00 ホテル出発、10:00 天安門広場近くにある中国銭幣博物館に到着。見学後、徒歩で国家博物館へ行き、入るのに40分も並んだ。見学後、前門近くの「致美樓飯莊」で北京料理を賞味。その後、琉璃廠へ、古籍書店で書籍などを購入。17:00 ホテル着。18:30 最後の夕食はホテル内で広東料理。

国家博物館で鎮江から出土した「『論語玉燭』銀鍍金酒令筒」という唐代の筒形容器を目にし、その形は亀の台座をもつ筒形で(図17)、福岡県筑紫郡武蔵寺から出土した康和五年(1103)銘の金亀経筒(図18)と酷似する(奈良国立博物館1977)。また、上記両者は、個人蔵の重熙八年(1039)

銘の遼代水晶経筒（図 19）と同じ意匠でもある。

2018年7月4日（水）

09：00 ホテル出発、10：00 北京国際空港着。CA167 便北京 12：50 離陸、17：15 定刻に羽田空港着陸。20：16 発の東北新幹線で帰盛。

おわりに

今回は、中国遼代における法舍利埋納遺跡の調査を通して、11 世紀中葉に経典を法舍利塔に納入した事例が多く存在したことが確認できた。遼代の法舍利塔は、12 世紀に隆盛した日本の相輪をもつ経筒と意匠が近いと分かる。福岡県筑紫郡武蔵寺経塚出土の康和五年（1103）銘の亀趺経筒は、屋蓋露盤に当たる部分に木製彩色の蓮華座があり、付属する玉や飾金具から華麗な装飾があったと推測される。類例としては、遼代・重熙八年（1039）の亀趺水晶経筒、唐代・「論語玉燭」亀趺銀鍍金酒令筒とか中国に存在しており、これらの特異的な亀趺筒形容器は系譜的に継承関係があることが指摘できよう。

参考文献

奈良国立博物館 1977：『経塚遺宝』、1977 年。

徳新等 1994：「内蒙古巴林右旗慶州白塔発現遼代仏教文物」、『文物』1994 年 12 期。

遼寧省文物考古研究所等 2007：『朝陽北塔—考古発掘與維修工程報告』、文物出版社、2007 年。

市元壘 2011：「契丹の歴史と文化」、九州国立博物館編『草原の王朝 契丹—美しき 3 人のプリンセス—』、2011 年 9 月 27 日。

劉海宇 2018：「中国江南地区における法舍利埋納遺跡調査記」、『岩手大学平泉文化研究センター年報』第 6 号、2018 年 3 月。

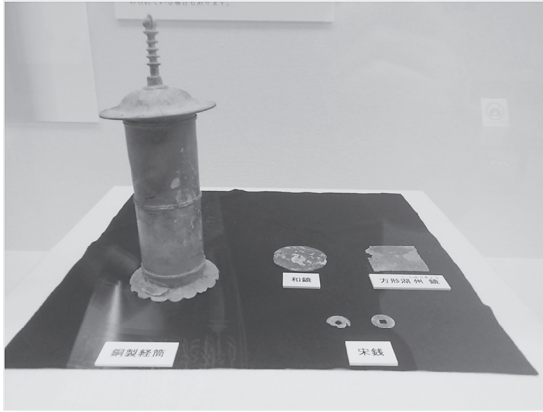


図1 北部九州経塚出土の経筒と供養品



図2 赤峰博物館外観



図3 墨書経袱と木製法舍利塔

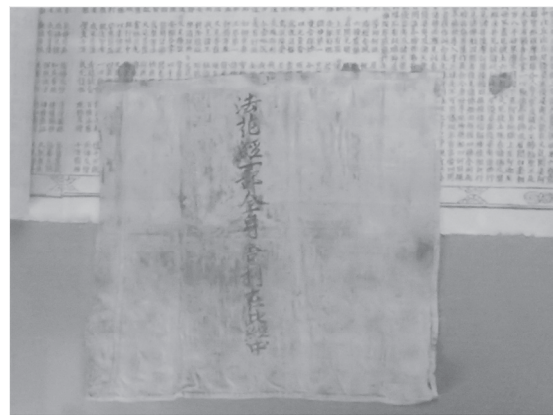


図4 紙本『法華経』と墨書経袱



図5 慶州白塔の建塔碑銘



図6 木製金箔法舍利塔



図 7 銀製法舍利塔



図 8 塔幡付き木製彩絵法舍利塔



図 9 慶州白塔



図 10 慶州故城の城壁址

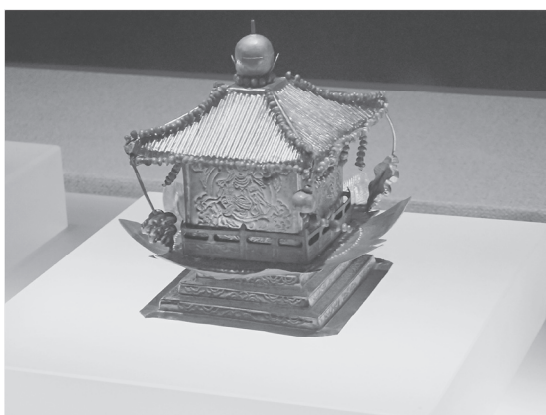


図 11 朝陽北塔の金舍利塔



図 12 北塔の七宝塔と木胎銀棺



図 13 北塔の法舍利塔



図 14 北塔の木製法舍利塔



図 15 雲居寺の山門と南塔・北塔



図 16 石経山雷音洞



図 17 『論語玉燭』銀鑿金酒令筒



図 18 福岡出土の金亀経筒



図 19 遼代水晶経筒